No.157　濾胞性リンパ腫(G1)

熊本医療センター　中島　一樹

① 症例：74 歳、男性
② 既往歴：糖尿病
③ 臨床経過：2 年前より腋窩のリンパ節腫大あり、半年前から頚部のリンパ節腫大、左鼠径部のリンパ節腫大がある。全身のリンパ節腫大。
④ 検体、材料：リンパ節捺印
⑤ 細胞診所見：中型リンパ球大で核のくびれの目立つ腫瘍細胞が出現。時に深い切れ込みを有し 2 核様に観察されるくびれ細胞もみられる。周りには大型の組織球様細胞が出現し、ホジキン細胞との鑑別を有した。
⑥ 組織所見：大型の胚中心芽細胞(centroblast)と中型の胚中心細(centrocyte)からなり、腫瘍細胞は濾胞を模倣する増殖パターンを示している。腫瘍性濾胞の境界は不明瞭。胚中心の極性はみられず、腫瘍細胞は濾胞内において均等な不分布を示していた。TBM も見られない。
⑦ 鑑別点、文献：反応性濾胞過形成(RFH)... 小型リンパ球を中心に中型あるいは大型の幼弱なリンパ球が散在している。TBM は胚中心の存在を示唆する

マントル細胞リンパ腫... 中型リンパ球大の腫瘍細胞が単調な増殖で出現。一部に大型類リンパ球も混在する。核は類円形から、くびれを有するものもある。
免疫染色にて CD5,CyclinD1 などが陽性像を示す。

文献

カラーアトラス　リンパ節細胞診　悪性リンパ腫を中心に　光谷俊幸　畠山重春　岸本浩次
悪性リンパ腫　臨床と病理―WHO 分類(第 4 版)に基づいて―吉野正　中峯寛和　岡本昌隆
2000 例を越える連続登録例の中央診断に基づいた悪性リンパ腫の病型頻度
―WHO 分類第 4 版もふまえて―　岡本昌隆　新津望　三浦偉久男